

更
地

太
田
省
吾

家の解体を了えた更地。

更地に、白い流し台、便器、プランタンが、ぽつんぽつんと残されている。

舞台両端に、崩されたブロックと廃材の山。

プロローグ

まだ暗い舞台を、男と女が歩いてくる。

強い雑音の奥から物語りがきこえてくる。

男の声 ある晩一軒の家が地面から持ち上がって、空中をふわふわ浮き上がり動き出した。

女の声 あたりはまっ暗だった。家が空中を飛んでゆく時、それといっしょになにかしゅっしゅっという音が聞こえたという。

男の声 家の中の者たちは、後生だから止まってくれと家に頼んだ。すると家は止まった。

男の声 家が止まった時、家の者たちは、灯油を切らしていることを思い出した、そこで彼らは、いま降り積もったばかりの柔らかな雪をすくって、ランプの中に入れた。

女の声　すると、その雪は、燃えはじめた。

男の声　その様子を見ていた人々はこう言った。「見ろよ、この家では、雪を燃やしてランプを点

してるぞ雪が燃えているぞ。」

女の声　けれど、この言葉が聞こえたたん、その家のランプの火は、消えてしまった。

― 到着

音楽。

暗い更地に、男と女が立っている。

レインコートの下から、男の方はパジャマ、女の方はネグリジェの裾がのぞいている。

二人、更地を眺めている。

女、更地にしゃがむ。

男、更地にしゃがむ。

二人、しゃがんでいる。

男の目が女へ。

女 ……うん。

男 ……そうか。

女 ……で。

男 ……いや。

女 ここ？

男 いや……ああ。

女 あやしいとは思っていたわ……急に旅に出ようなんて。

男……旅さ……旅だよ。

二人、それぞれゆっくりと更地を散歩する。時々、お互いに相手へ目を向ける。永年住んだ家がなくなっている。自ずと感慨が浮かぶにちがいないし、相手に感想を求めたくもなる。しかし、それを口にするのをためらう気持ちも湧いているらしい。二人、ふと立ち止まる。
音楽、やむ。

女 え……なに。

男 ……なんだい。

女 ……なにか、言ったかと思って。

男 いや……うん、「旅の衝動はわれわれの身体のずっと深いところから湧いてくる」……湧いてくる、身体のずっと深いところから……うん、そういうわけだ。「人間の精神には、旅立ちを促す機構とでもいうべきものが最初から組込まれている」……促されたってわけだ。

口を開いてみたものの、男、やり場を失う。

女に見られ、男、石ケリでもするようにして更地を跳ぶ。

やがて、また女と目が合う。男の足が止まる。

女 おんぶしてもらおうかしら。

男 え……。

女 おんぶよ。

男 ……ふーん、なにしてくれる、おんぶしたら。

女 ……ああ、なんでも。

女、男の背中にぽんと飛び乗る。

男 ……どうしたんだ。

女 ……。

男 ……どうなんだ。

女 待って、十五秒。

男、時を待っている。

女 ……ちよつとしたものね。

男 経ったのかもう、十五秒。

女 感じるわ、そりゃ、いろいろ。

男 ああ…いろいろあったわけだしな。

女 うれしい日もあったし。

男 よかっただろう。旅に来て。

女 ありがとう、おろしていいわ。

男 なんだったんだい、おんぶ。

女 ……安心したわ、なんだか。

男 いや…うん、そうか。

女 ……見えてもおかしくないわ、お月さん、屋根がなくなったんですものね。

男 え……いや、おかしくないさ。

女 お月さん。

男 ……ああ、見えてるよ。

女、男の背中からおりる。

二人、それぞれの位置で上を見ている。

女 空ね、夜空。

男 ああ……星もあるしな。

女 そうよね。

男 屋根があつたから、見えなかつたんだ。

女 はじめてね、ここから夜空見たの。

男 夜空だってことは、つまり、地球の上だってことだ、ここは、つまり……。

女 そう……地球ね、そうそう。いくつか大陸があつて、海があつて……そうそう、その一番大きな大陸の東の端に細長い島があつて……そうよ、ここは居間だったわ、ね。

男 ……居間。

女 居間だったわ、ここは。……そして、ここが、台所。

音楽がきこえる。

照明、明るくひろがっていく。

2 住居跡

二人、流しを運ぶ。

女 ……一人の男と一人の女、何人かの子供、食べたり寝たりするためのわずかの家具什器、家庭に必要なものはこれだけのものである。世界創造のはじめは丁度そのようなものであった。そして、世界創造のはじめから今日に至るまで、常にこれだけのものが家庭の中に存在しているのである。すなわち、一人の男と一人の女、それに何人かの子供と幾つかの道具……「おはよう」、朝目覚めたとき夫は妻にむかって言う。するとその時、それは初めての朝のようだ。長い夜が終わったのちに現れた最初の朝のようだ。

二人、流しをかつての台所の場所に置く。

男 どうしたんだ。

女 ……うん、あたしたち、みんなそろってるわ。一人の男と一人の女、それに何人かの子供と
幾つかの道具……ね。

男 ……ああ、そろってるよ。

男、材木やブロックを運び、住居跡をつくる。

女、見ている。

女、やがて手伝う。

男 「人間の精神には、旅立ちを促す機構とでもいうべきものが最初から組み込まれている」…
…組み込まれているんだ、最初から。な……でと……。

男、ポケットから本をとり出す。

男 「安全であることがわかっている棲家から、動物は飢えの恐怖や性の欲求に促されて、死の
危険を孕む空間に出てゆく。それが旅であり、それがそのまま生きるということなのである」

…旅とはそういうことなんだ、すごいじゃないか。

女 そうなの？

男 なにがだい。

女 だから、飢えの恐怖や性の欲求に促されて。

男 だから…つまり、深く考えてみるとそういうことになるんだよ。

女 深く考えると、危険なのね。

男 ……じゃないとは言えないんだよ。

女 飢えの恐怖や性の欲求に促されているのね……深く考えると。

男 ……書いてあるんだよ、そういうふうには。

女 ふーん……。

男、住居跡を眺める。

男 ……狭いもんだ、こうしてみると。子供がかけまわったな、あいつらの小さいころさ。……か
けまわらなくなったら、いなくなった。

女 この部屋と奥の六畳しかなくてね、はじめのころ。ここに四人が寝ていたんだわ。

男 セーター編んでいたことがあったじゃないか、そこで。

女 そう、いろいろよ。まだまだいろいろあったわ、ね。
男 玄関は、と……。

男、玄関にとりかかる。

女 そういえば、おなか空いてきたわ。持ってきているのよ、お弁当、残りものだけど。
男 そういえばって、どういうことなんだ。
女 ……あ、あれよ、あなた飢えの恐怖とかなんとかって言ってたからだわ。
男 ちがうだろ。飢えと空腹はちがうだろ。
女 ……と、このあたりかしらね、食堂は。椅子とテーブルがいるわ。

男、手にしているブロックを食堂の方へ運ぶ。

3 食堂

女 どのくらい食べたのかしらね、ここで、あたしたち。

男 計算してみたんだよ、この間。いや、人間どのくらい食うものかってね。それがすごい数字になるんだ。肉だけでもすごいんだ、食べてしまう動物の数がさ。

女 あたしのきいているのは、台所に立った回数よ。

男 ま、いいからさ。いいか、まず一人の人間が一週間で食べる動物をだな、見積もってみたのさ。牛250g、豚250g、鶏250g、魚300g、卵5個。少し少な目にこう見積もったんだ。

女、テーブルをつくる。

男、女のあとをについて、テーブルの材料を運ぶ。

男 そして、いいか、それぞれの動物たちの食べられる部分は、牛一頭100kg、豚一頭50kg、鶏1kg、魚200gとする。でさ、ま、七〇年食うとして、七〇年とは3600週だ。とする
と、いいか、われわれ人間一人一人が食う動物の数はこうなるんだ。牛91頭、豚182頭、鶏364羽、魚1092匹、卵17700個……これをだな、運ぶとすると、トラックが何台要ると思う。ま、50台は下らんだろうな。その50台の上のこいつらがみんな生きていると想像してみると……な、すごいだろう。

女 ……椅子が少し低いわ。

女、テーブルの上に包みをのせる。

男、ブロックを運ぶ。

男 おれとお前で、牛200頭食っちゃもうんだ。そいつらが生きていて皆鳴くとすると、うるさいだらうな。モーモー、モーモー、ブーブー、プーブー、魚は鳴かないから静かだけだな。……
うん、牛200頭か。

食卓がそれらしくととのった。

二人、靴を脱ぎ、コート脱いで、食卓につく。

女、包みに手をかける。

女 おぼえています。今夜の食事なんだったか？

男 え……おぼえてるよ、おぼえているさ。……え、スパゲッティを持ってきたのか。

女 なかったんですもの、他になにも。急がせるし、あなたが。

赤いスパゲッティ、ナポリタン。

女 じゃあっと、いただきますしよいか。

男 ……出てないぞ、フオーク。

女 あ……。

男 あって……まさか。

女 急がせたからよ、あなたが。どうしよいかしらね。

男 ……なにもないのか、ハシとかさ。

女 ……指ならあるけど。

男 しかし……スパゲッティだからな、相手は。

女 だって……仕方ないわ。

男 うん……ま、仕方ないか。

女 いただきます。

男 ……いただきます。

女、指で食べる。

男、指で食べる。

女 ……おもしろい味、ね。

男 ……旅の味か、な、そう考えればいいか。

女、さかんに食べる。

男 ……どうしたんだ、お前………いや、おいしそうだな。

男、女を見ている。男、女を見ながら、指をなめ、席をはずす。

4 ゴリラの考え

男、ブロックの山に腰を下す。

男 「動物は旅をする。動きつづける。その理由は何なのか。なぜマウンテン・ゴリラは巣を作って二・三泊しては翌朝また移動し、別の場所に別の巣を結ぶのか」

女 そうなの？ うん、マウンテン・ゴリラ。

男 うん、そうらしい。

女 どうしてかしらね。

男 「動くこと、新しい空間へと出ていくこと、これはすべての動物にとって常識である」

女 ……ふーん。

男 われわれの遙かな祖先にとっても、それは常識であった。一つの場所にしばらくとどまっていたら、何らかの形で移動への促しがやってきた。その促しは、胸の内、いや、人間の身体を構成するすべての細胞の内であった。そして、数万年前の記憶が今なお人間をつきうごかす」…

女、指のケチャップをなめている。

女 つきうごかされているのね、あたしたち、深く考えてみると。

男 ……ま、そういうことになるかな。

女 ……そうなんだわ。

男 うん…。

女 あなた、一昨日の夕食、なに食べたかおぼえていますか？

男 ……なんの話だ。

女 マウンテン・ゴリラよ。どうして彼らはそうして、毎日移動するのか。毎日移動するとね、いつかまた同じところへ戻ることになるんだと思うの、そうでしょ。そうすると、どう……あの日はここで、こんなことがあったとかって思い出すわ。あんなことも、ほら、とかって笑ったり。

男 ゴリラが笑うのか。

女 いけないかしら。

男 いや、いいけどさ、笑ったって。

女 笑わなくてもいいの、泣いたって。うん、笑わなくても泣かなくてもいいの。感じるのよ毎日、いろいろ。毎日、いろいろあるのよ、なにもないなんてことはないの。一昨日だって、なにもなかったわけじゃない。息しているんだもの、あたしたち……何年生きるのかしらね、ゴリラ。

男 え……うん、そうだな、案外短いっていうからな動物は。三、四十年てとこかな。

女 毎日をおぼえていられるようにしようとしているんだわ。四十年の毎日の、いろんなことを、そうしようとしているんだわ。

男 ゴリラがか……。いや、奴らだって考えているかもしれないんだ。……落ちつこうか。

女 落ちつかないの、あなた。

男 ……いや、落ちついていないけどさ。

女 そうね、落ちつきましようか。

男、居どころを探す。

女、居間らしきところへすわる。

女 ここへ来たら……居間に。

男 なくなったわけじゃないんだ。

女 ……なにが。

男 いや……いろんなことがさ。

男、便器に腰を下す。

男 な……ちよつと来てくれないか、話があるんだ。

女 ……いやな話はいやよ。

男 いやな話じゃないよ。

女、男の横に腰を下す。

男 生活を変えようかと思ってさ。正しい生活をはじめる。

女 ああ、いい話ね。そうね、そうしなくちゃ。

男 ……うん。

女 そうそう…：…そう。

男 で、なんだろうな、まず、やらなくちゃならないのは。

女 朝ね、まず。早起きしましょう。そうすれば、ばたばたしないですむわ。朝ばたばたしないとすれば、毎日がばたばたしないようになるし、そうすれば…：…。

男 うん、そうか、朝早くね。

女 鳥といっしょに起きるのよ。

男 鳥といっしょか。…：…早いぞ、あいつら。

女 明け方の光、あれをあびて…：…あれをあびて、今日なんだ、今日はこの日のことなんだって思うの。

男 うん、今日は、この日のことなんだ。…：…うん。

女 おはよう。

男 え…：…ああ。

女 朝目覚めたとき、妻は夫に向かって言う。

男 おはよう、どうだい今朝は。

女 ええ、とてもいい気持。この光、この空気。……それは初めての朝のようだ。長い夜が終わったのちに現れた最初の朝のようだ。……で、どうするのかしらね、あたしたち。

男 ちょっと待て、ちょっと。

男、廃材の山から窓枠をもってくる。

男、女を窓枠越しにのぞく。

男、窓の外から手まねきする。

女、男の方へ。

二人、窓からのぞく。

男 いいぞ、やってみてくれ、今のやつを。

女 ……今の。

男 へおはよう～だよ、ほら今やったじゃないか。

女 ……おはよう。

男 おはよう、どうだい今朝は。

女 ええ、とてもいい気持。この光、この空気……それは初めての朝のようだ。長い夜が終わったのちに現れた最初の朝のようだ。

女 ……おもしろいわ、発見ね。

男 そうだろう、そうなんだよ、窓ってのはおもしろいんだ。

女 いるのね、あたしたち。

男 うん……そこにな。

女 なにやってたんだっかしたら、あたしたち。

男 うん……朝だよ、鳥といっしょに起きたんだ。

女 そうそう、そうだったわ。あたし顔洗いますから、お茶おねがいね。

男 お茶……おれが入れるのか。

女 正しい生活ではあたりまえよ。

男 うん……わかったよ。

女 そんな顔していないわ、あの人。

男 ……じゃあつと、湯でもわかそうか。

女 彼女は洗面に向いました。ほら食堂にあなた一人だわ。あ、あなた新聞。

男 新聞……どうかしたのか。

女 読もうとしてるわ、あなた

男 ……湯のわくまで新聞でも読もうと思ってね。

女 あとにしましょ。

男 正しい生活でも読むだろ、新聞は。

女 今、ほら聞こえるのは鳥の声、木を吹く風の音、それで充分、雑音は要らないの。

男 新聞は……うん、雑音か。……じゃあっと、どうしていようかな、湯のわくまで。

女 ゆったりとしているの、どうしようかなんて考えずに。

男 うん……まだ時間は充分あるわけだしと……そうか、ゆったりか。どうしようなんて考えないか。

女 笑ってるわ、あなた。

男 笑ってる？ ゴリラみたいだな。

女 ゴリラが笑うの？

男 言ってたじゃないか、さっきお前が。

女 ……なんでそんなこと言っただったかしら。

男 うん……なんだかややこしくなりそうだな、思い出そうとすると。

女 ゴリラは、笑わないのね。

男 うん……笑わないんだが、なんだか話のなり行きで笑うことになったんだよ。で、なんで笑ってるんだい。

女 ゴリラが？

男 そうじゃないよ、おれがさ。……気持悪いな、一人で笑ってるなんて。

女 ちがいました、一人ではありませんでした。なにか話をしていたのねあたしたち、台所と洗面所で。ほら、あたしが笑顔で戻ってきました。

男 ふーん……なんだろう、なんの話をしているんだい、二人は。

女 なんでもないことよ、きつと。他人から見たら、なあんだってこと。それでも二人はおもしろくてね、笑っているのよ。

男 ふーん……そうか。

女 笑い合ってる、あの二人……ね。

男 え……ああ、笑い合ってる。

二人、目を合わせる。

女 ね、見られましょうか

男 見られる？

女 中に入りたい。……見てるだけなんて、いや。

男 じゃ、中へ入ってみればいいじゃないか。

女 あなたは？

男 ……おれも入るよ。入るけどさ、あとにするよ。お前をちよつとのぞいてみたいんだ。

女 のぞくの……。

男 うん……おれはね、よく見たいんだよ、お前を。いいか、ここからのぞくだろ、そうするとさ、あ、お前がいるんだって思うと思うんだ。うん……ちよつと驚くような気持ちでさ。そうさ、お前って女がね、生れて……ほら、今そこにそういう身体をして、そういう顔をして、そういう声をして、いろんなことして、いろんなこと考えて……いるんだ。のぞかせてくれよ。

女 ……待って、十五秒。

男 なんない。

女 うん……。

女、家の中へ歩み、脱いだコートのポケットからコンパクトを出し、鏡をのぞく。

男、窓枠を女の方へ向けている。

女、男の窓枠の中で腰を下ろす。

5 誕生

男 ……あれだな、オシメしていたんだな、お前も。

女 ……なんでオシメの話なの。

男 怒っているのか。

女 もっと、他の話をして。重大な話が聞きたいの。なにか、大事なこと、きっとあたし忘れてるのよ、大事なことを。……そんな気がするの。今のうちに気づきたいの、それがなんなのか。今のうちに……。

男 オシメの話じゃいけないのか。

女 ちがうの、もっと……ちがうでしょ、あたしの言っていることは。

男 お前がさ、生れたんだってことなんだぞ、おれの言っているのは。それが言いたかったんだ。

女 ……で、オシメなの？

男 生れてきたんだ、そうだろ、重大なことじゃないか。お前はこの世に生れてきたんだろ。

女 ……生れて……あ、そうそう、あたしは生れてきた。

男 ……いいかな、そこへ行って。お前の隣へさ。

女 あ、いいわ。

二人、並ぶ。

音楽。

女 オシメの話して。

男 ああ、そうだった、……オシメしてたんだ、な、おれたち。おもしろいな、な、おもしろいだろう。

女 ちょっとね、おもしろいわね。

男 いや、かなりおもしろいよ。なかったんだからな、生れてくるまで、この世は。

女 あたしたちにとってはね。

男 うん……そりやあることはあるんだが、なかったんだから。

女 ……うん。

男 手伝ってくれるか。

女 なに。

男 なにかも、なくしてみるんだよ。

女 なにかも……。

女 どこへ行くの。

男、舞台奥へ。

男、白布をかつぎだす。

女 どこへ行くの。

男 いや、かなりおもしろいよ。つるんと生まれてきて、な、ここにいるんだから。

女 つるんとしてことないわ、あなた産んだことないからわからないでしょうけど、つるんとなんて産めないのよ。

男 いいか、……いち、にの、さん。

二人、舞台奥の白布を引く。

音楽の中、布が舞台全面を覆っていく。

舞台全面を覆う布はなかなか重い。

二人の動作は労働に似てくる。

男 ……そりゃ、本人は血まみれで、くしゃくしゃの顔してギャーギャー泣きながら生れてくるんだけどさ。

女 人口がまた一人増えたってことになるのよ。でも、本人にとっちゃそんなことないわ、逆よね。世の中がはじまった、そんなものなかったのに。

男 　　で……。

女 　だれもそんなこと言っても認めてくれないけど……世の中は多勢だし。あたしが生れるずっと昔からあったって言うだろうし。

男 　　で……。

女 　　でって……だんだん育ったわ。

男 　　うん……このおれがさ、おれだってことになっていた。いつのまにか……そうになっていた。

女 　　……ガラガラを振ったり眺めたり、いろんなものを口へ持っていったり、イナイイナイバーをするとキャツキャツと笑ったり、床に落ちている小さなものをひろったり……ハイハイできるようになって。……まだかしら。

男 　　もう少しだ、ほら、あっち。

二人、布をひろげええ。

二人、布に寝ころぶ。

二人、ヘアバババ……～赤ん坊になる。

女、男へ近寄る。

女 　　……これは顔。いいえ、それは顔ではありません、それは目です。それは鼻……口……そうで

す。その全体が顔なのです。……うん、いいえ、その全体は身体なのです。手、足、首、オツパイ、お腹、……この全体が身体なのです。もちろん、顔も身体の一部です。オ
ルゴール……絵本……オシメ……赤い……黄色い……青い。水……火……火はあつい……水は
つめたい……赤い鳥小鳥なぜなぜ赤い、赤い実をたべた……これは涙、水ではありません、体
液が混じっているんです……これが風……青い鳥小鳥なぜなぜ青い、青い実をたべた……ほん
と、いろいろ覚えたわ。……恥かしいこと……うれしいこと……くやしいこと……好きな子も
できたわ。

音楽、やんでいる。

二人、寝ころんだり、身を起こしたりしながら、この場を演ずる。

男 オシメしながら恋をしたのか。

女 今、十六になっています、あたし。

男 え……十六か。そうか、十六の時もあった。

女 とすると、十八か、あなたは……どんな子だったの、あなたの好きだった子。

男 ……いいよ。

女 お尻の大きな子でしょ。

男 なぜだ。

女 あの女、^{ひと}大きかったじゃない。

男 大きかないよ。

女 大きかったわ。あたし、あの女の魅力のありかを探したんですもの。どこが魅力なのかしらって。そしたら、お尻だったわ、大きなお尻。安定感。

男 十七だぞ、あんなに大きかないよ。

女 だから、その子も大きいのかと思って……。

男 ……うん、馱でね、いつのまにか会釈をするようになったんだよ。おれは黒い制服、あの子は赤いリボンのセーラー服だった。他人が見ても会釈かどうかわからないくらいのね、ほんのちよつと、こう目を合わせてこう……、それだけだった……。

女 口もきかなかったの？

男 ……いつ声をかけようかと思っていたんだけどね、ずっと目だけだったよ。忙しい人混みやアナウンスの声の中で、その子の目だけ、シンとしておれを見ていた。

女 ……よかったわね。

男 うん、よかったよ。

女 ……で。

男 ある日、おれはついに彼女に近づいてこう言った。「文化堂で、四時半」……文化堂ってのは

本屋のことだよ、近くの。……思いきって言ったんだ、「文化堂で、四時半」……。

女 来なかったのね、その子。

男 来たよ、なぜだ。

女 よくあるから、それっきりの幼い恋。

男 来ていたよ。本屋で二人の目が合ってね、おれは近寄ろうとしたんだ。

女 あわててつまづいたのかしら、あなた。

男 待てよ。

女 手でも握ったの、いきなり。

男 うるさいなあ。

女 あたし、あなたに手握られた時、びっくりしたんですもの、いきなりで。

男 そんなことしやしないよ、口をきいたこともないんだぞ。

女 あたしたちだって、そんなに口きいたことなかったわ。あなた、友だちとばかり話していたわ。

男 友だちってことないだろう、同棲していて。

女 あたしは生れて、いろいろな人に会ったのね。あの男ひととも会ったし、あなたとも会った。……

あなたと、会ったんだわね。

男 ……会った、そうだった。

女 ……ふーん。

二人、見合う。

男 二人になれる時を待っていたんだよ、おれは。

女 ふーん……知らなかった。

男 おぼえてるよ、おれは、あの時のお前の手。やわらかかった。おぼえてるのかな、お前は。

女 握られた方ですからね、あたしは。あたし、手を盗まれたような気持だったわ。パツと握ったかと思うと、パツと放すんですもの。

男 触ってみようかな。手を貸してくれないか。

女 で、どうしたの、彼女。

男 え……ああ、もういいよ。

女 彼女、まだどこかで生きているのよね。

男 ……うん、そうだろうな。……いや、おれは近寄ろうとした。その時、彼女の友だちが声をかけたんだ。彼女はおれの背中の中の向うでしゃべりだした。友だちにこの場を見破られまいとしたんだろうな、やけに大声でね、しゃべっているんだ。おれは、何度か確かめたよ、その声の主が本当に彼女自身なのかってさ。……くっだらな話をね、ギャーギャー大声でさ、延々とだよ。

おれは、彼女の口から出る言葉は宝石にちがいないと思っていたんだろな……その声を聞いていて、血が引いていった。……で、つぎの朝から、おれは電車を五分早く乗ることにしたんだ。

女 ……ふーん、年月っておもしろいものね。

男 ……なんだい。

女 ……うん。

男 あったんだよ、そういうことが。

女 ふーん。……あなたが、そんなことしてたころ、あたしはキスをせがまれていたんだわ。

男 ……ふーん。

女 制服を着ている時は、まるで真面目な子だったけど、その夏、海で会ったの、制服を脱いで急に大人っぽくなっていてね。キスさせろって言うの。

男 ……ふーん。

女 何日もなの、あとをつけてきて言うの。あたし、そんなことしたらあなたの舌を噛み切りますって言ってやってやったの。でも、その子の言い方ひどく乱暴なのに憎めなかった。なんて言ったらいいかしら……。

男 でやられたのか、キス。

女 ……うん。

男 噛み切ってやったのか。

女 ……うん、自分の方からもしちゃったわ。

男 ……ふーん、よかったな。

女 そう、よかったわ。長いキスだった。

男 で、どうなったんだ。

女 あれよ、ダフニスとクロエね、だからよかったわ。その先どうしたらいいのか、二人ともわからなかったの。どうにもならないで、秋には遠くへ行っちゃったわ、その子、あたしにツパの匂いだけ残して。

男 ダフニスとクロエは、キスさえ知らなかったのでした。二人は好きで好きでしよるがなかつたのですが、二人つきりになっても、なにをどうすればいいのか知らなかったのでした。だから、二人は二人つきりになりたいのに、二人つきりになることはつらいことでした。身体中が痛むように苦しくなるのでした。

女 かわいいそう…かわいいそうね。

男 ああ…かわいいそうな話だよ。

女 ね。

男 なんだい。

女 ……うん。

男 なんない。

女 あたしたちは、ダフニスとクロエじゃなかったわね。

男 うん……よかったな。……な。

女 え……うん。よかったわ。ね……おぼえているわ、蝉、あたしたちの夏。

男 蝉……ああ、おぼえてるよ。……うん、ちよつと待ってくれ十五秒。

6 夏

男、布を持ち上げ、中へ潜る。

女 どうしたの、あなた。

男 いや……ちよつと探しものだよ。

女 ……探しもの？

男 いや、要るんだよ、帽子がさ。

女 ああ、帽子ね。そう、あたしたち、かぶっていたわね。

男、布から顔を出す。

男、麦ワラ帽をかぶり、女に古い帽子をかぶせる。

女 あたしたちの夏ね。

男 蝉を聞いた。……な。

女 聞こえていた。蝉が鳴いて、あたしたちは蝉を聞いた。

男 蝉が高く鳴いていた。声を張って鳴いていた。

女 林の全部が蝉だった。

男 林の全部が蝉だった。雨降るみたいに鳴いていた。落ちるみたいに鳴いていた。

女 雨降るみたいに、落ちるみたいに鳴いていた。蝉は今日を鳴いていた。

男 落ちるみたいに鳴いていた。蝉は今日を鳴いていた。鳴いて鳴いて鳴いていた。おれの呼吸は荒かった。

女 鳴いて鳴いて鳴いていた。あたしの呼吸は荒かった、荒い呼吸で目を閉じると、蝉が身体の一部にしみこんだ。

男 蝉でおれはいっぱいだった。蝉の声でおれはあふれていたんだ。

女 蝉でいっぱいなのあなたの呼吸が聞こえていた。あたしの身体はあやふやになってた。

男 おれは、あやふやなお前の身体に触った。

女 ……子供が生れたわ。

女、立ち上り、布団の中へ。

男 おい、待ってくれよ。急になんだい。頬だ、今おれはね、お前の頬に触ろうとしているんだから。

女 でも……あたし、もうこっちへ来てしまったわ。

男 ……行ってしまったのか。

女 ごめんなさい。

男 ……戻れないのかね、ここまで。いいじゃないか、ちょっと戻ってくればいいんだから。な、戻ってくれよ、あの夏みたいに頬に触りたいんだよ。

女、布の中で男の声を聞く。

男、女へ近づく。

男 林の全部が蝉だった。雨降るみたいに鳴いていた。……蝉でおれはいっぱいだった。蝉の声でおれはあふれていたんだ。……おれはあやふやなお前の身体を抱いた。

布の中で、女が動く。

布の中から、交響曲が聞こえる。

女、布の中から、古いラジオを抱いて出てくる。

女、遠くを歩く。

女、ラジオを置く。

女
……聴かなくなったわね、このごろ。……よく聴いたわ。

二人、交響曲を聴いている。

やがて男、交響曲を指揮する。しだいに熱をおびる。

女、交響曲を遠く聴く。

女 (大声で) あなた言ったわね。二人だけしか知らないことってのは、現実にはなかったこと
かもしれないって。

男 え……なんだって？

女 現実にはなかったことかもしれないって。二人だけしか知らないことってのは、そうかし

れないって。

男　なんだかややこしいな。やめてくれよ、ややこしいことは、今忙しいんだ。

女　あなたとあたし以外、だれも知らないことって、そうなるのかと思って。

男　うん……そうなるのかね。

女　でしよう。あたしそう思ったの、そうなるのかなあって。

男　おれたちしか知らないことか……。

女　あるわ、ね、いろいろ……。

赤ん坊の泣き声。

男、指揮をやめる。

男　邪魔されるんだ、いつも、いい時に。うるさいぞ、良子。

女　敏夫よ、この声は。

男　……生れてたのか。

女　……あたしたちしか知らないようなこと、きっとあたしの方がよくおぼえているわ。……なにかおぼえています、あなた。

赤ん坊の声と交響曲、遠ざかっていく。

7 黄金の時

男 おぼえてるさ。

女 どんなこと。

男 いろいろさ。……うん、良子のオツパイがとがってきた時は驚いたよ。本人は気づかないでいるんだよ。おれは見たんだ。夏だった。お前にそのことを言ったら、お前は自分のこと言われ
たみたいに恥かしがっていた。

女 敏夫の部屋で、いやらしい雑誌見つけたわね、あたし。そのこと言ったら、あなた自分のこと
言われたみたいに恥かしがっていた。あたし、なぜ男ってって言ったわ。あの時のあなたの顔
おぼえているわ。

男 ……あれは、おれたちしか知らないことだ。

女 ええ……あれはね。そう、あれはあたしたちしか知らないことだわ、だれも。……だから、な
かったことかもしれない。

男 ……あつたじゃないか、ほら。

女 だって、証明できます？ だれかに、あの時のあの顔、そういうことがあったんだって。
男 ……うん。だれも聞かないな、おもしろくもないし。
女 ……証明したってしょうがないことだわ。

女、布に潜る。

男 おい、どこ行くんだ。

女 ……あれ、おぼえています？ 秋だったわ、山登りしたわ。

男 ああ……おぼえているさ。

男、布に潜る。

二人、布の中。

女 あの子たちもおぼえていますよ、きっとまだ。

男 忘れてるさ。……なに探してるんだ。

女 バスケットないかと思って。

男 ……バスケットか。……あいつらもういい歳だ。あの時のおれたちとそうちがわなくなっ

ているんだぞ。

女 あら、ほんとだわ。

男 おぼえているのかな、あいつら。おーい、敷物あったぞ。

女 よかったわ。……バスケットはどこなのかしらね。……小さな山登り……なんにもない山で、人は馬鹿にして登らないような山。

男 霧がわいてきた。

女 頂上でね。……霧の中に閉じこめられて、なんだかあたしたち、取りのこされたような気持ちになって……地球の外に。

男 ああ、往生したよ……。

女 あったわ、バスケット。

男 あったか。

女 ……どこだったかしら、あたしたちの話。

男 往生したんだよ、頂上で、おれたち。

女 ああ、そうそう……でも、あの時、あたしたちは家族なんだって、そう思ったわ。いつもそんなこと思ったことなかったのに。

男 子供たちは顔色を変えていた。

二人、布の外へ出てくる。

男、敷物をひろげる。

女 なにも見えなかったわ、霧で。ニメートル離れたらもう見えなくなるの。あたしたちは、お弁当当まん中にしてくっついて座ったわ。……みんなの顔が見えたわ。……あなたがそこに座っているとする、あたしはここね。……そこよ、あなた。

男 ……ああ。

二人、座る。

女 ……だから、敏夫はここで、良子はここ。……こうだったわね。

男 うん……ちよつと待っていてくれ、今持ってくるからさ。

女 なにを？

男 いや、子供たちさ。すぐだよ、さっき見かけたんだ。

男、布に潜る。

女 いいのに、それほどリアリズムじゃないんだから。

男 すぐだよ。……ほら、いたいた。

女 ね、おむすびないかしら、そこらへんに。

男 おむすび……ないよ、そんなもの。

男、人形を（それらしい形をしたブロックか廃材かもしれない）抱えて、布から出てくる。

男 ほら、いたよ。

女 ……こっちが良子で、こっちが敏夫ね。

女、二つの人形を座らせる。

人形、座りが悪い。

女 あいかわらずね、行儀が悪いわ。

男 うん……仕方ないだろ。

人形、なんとか座る。

四人がそろった。

男 ……霧の中で、ちっちゃな四角になって、弁当を食べた。

女 そうね……これは現実にあったことですよ。

男 え……ああ、あったよ、そうだよ。

女 良子も敏夫も、話せばああって、きっと思い出すわ。

男 ……：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：？

女 おおすびないかしらね。

男 ないって言っただろ。

女 残念ね、おおすびがあれば、もっとはっきりするんだけど。

男 大丈夫だよ、はっきりしてるぞ、おれは。

女 この子たち頼りないから……。

男 うん……：：：：：ま、そうだけどさ。

女 で、この先は、この子たちおぼえていっこないわ。あの、なんとも言えない気持。

男 ……：：：：うん、なんとも言えないような気持か。

女 寂しいような、うれしいような……。

男 寂しいような、うれしいようなか、ちよつと恐ろしくて。

女 そうそう、ちょっと恐ろしくて。あれは、なかったことかもしれないんだわ。

男 ちょっと待てよ。……ややこしい話はやめにしてくれよ。

女 ややこしいことないわ……。いい、戦争はあったんです。

男 え……。ああ、戦争があったよ。

女 だれでも知ってるんですけどものね。年表にも教科書にも載ってるわ。それに……。あなたの通っている会社もね。

男 ああ、あるけどね、会社は今でも。

女 あたしとあなたが結婚したってことも、いろんな人が知ってるんですからね……。

男 あったんだ、つまり。

女 去年の旅行もね……。子供たちに写真見せたから、この子たちは知ってるわ。あ、それに、留守をたのんだから、隣の奥さんも知ってるわ。

男 そんなものでいいのか。

女 いいのかって？

男 あったことになるんだ、それで。……。

女 戦争にくらべると、そうね、ちょっと危いわね。

男 うん……。まあな。

女 でも、その先の細かいことはね……。

男 なかったのか。え、あの……。

女 ……。

男 うん……だれも知らないんだからな。あつたんだって言ってもだれもおもしろがってくれないしな。

女 でね……だからね、現実にはなかったかもしれないって、そういうことがどのくらいあつたのかしらと思つて……。

男 ちよつと待つてくれ。……うん、ややこしいな。

女 ややこしいことないわ。

男 お前の言いたいことはなんなんだ。なかったことにしたいのか、え、いろんなことを。

女 そうじゃないでしょ。

男 だって、つまり、そうじゃないか、さっきから、なかったなかつたって。え、だって、現にあつたことじゃないか。な、なんとか言つてやれよ、お前たち。

男、人形に手を出す。

人形、ころがる。

女 だから、そう言つてるのよ、あたしは、そのなくなるところが大事なんだって。

男
……。

男、布の上を歩きまわる。

女 あたし、欲しいの、たくさん、たくさん……本当にあっただってこと。生れてきて……いなくなるんですもの。

男 だから、あつたじゃないか。ほら、キスしたじゃないか、十六の夏にさ。あいつとも棲んでい
たんだし、おれたちの夏もあった、蝉が鳴いた夏だ。そして、子供が生れて……。

女 本当につてことよ、あたしが言っているのは。戦争はあつたんです、年表にも教科書にも載
ってるわ。でも、そんなことじゃないの。あたしの欲しいのは、そういうものじゃない。本当
につてことは、ほとんどなかったかもしれないようなことなのよ。あたし、ほとんどなかったか
もしれないようなことがいっぱい欲しい。ほとんどなかったようなことがいっぱいあれば……
なんでもない日のなんでもないことがいっぱいあったことになって……そうよ、なんでもない
日のなんでもないことがちゃんとおることになれば……どうなるんだったかしら。

男 そうだろう。……ほら、ややこしくて、自分でもわからなくなったじゃないか。

女 十五秒、ね。

女、布の中へ。

男、女のそばに腰を下す。

男 ……経ったぞ、十五秒。

女、布から顔を出す。

女 黄金の時……黄金の時が欲しいって……そう言ってるの、あたしは。

男 黄金の時……大袈裟なんだな。

女 いいのよ。大袈裟でも。黄金の時は、忘れても仕方ないところで金色きんいろに光るのよ。忘れても仕方ないようなことなんだけど。証明しようとしても仕方ないことなんだけど、忘れちゃいけないの。……忘れても仕方ないことがね、思い出せるような金色になって……なんでもない日のなんでもないことが忘れられないように金色にして……ね、わかるかしらね、あたしの言いたいこと。

男の口が大きく開く——アクビ。

女 ……。

男 ……で、その人生の黄金の時は、結局どうなるんだい、え……。

女 ……。

男 ……どうしたんだ。

女 うん……。

男 ……ちがうぞ。

女 見えたわ、アクビ。

男 だから……いや、ちがうんだ。ちがうんだよ。……いや、口は開いた、それは認めるよ、わかったよ。しかし、アクビじゃない。……だって、おれは退屈なんかしていなかったんだからな。大事なことを話していたんだ。

女 ……いいのよ。

男 よかないよ、アクビなんて。な……どうしたんだろうな、な、どうしてアクビなんか出たんだい。

女 ……仕方ないわ、出てしまったのよ。

男 仕方ないじゃすまないよ。だってお前、おれはアクビなんかしてしまっただ……。

女、大きく口を開ける。

女 ……なに、どうしたの。

男 ……いや。

女 ちがう、ちがうのよ。

男 うん……見えたよ、アクビ。

女 だから、ちがうわ……口は開いたわ、それは認めるわ、でも、アクビじゃない。だって、あたし退屈なんかしていなかった。あなたとここに来て、ほら、スパゲティー食べたり、ゴリラの話したり、おもしろかったわ。だから、ちがうの、アクビなんかじゃないの。

男 ……だから、仕方ないじゃないか、出てしまったんだから。

女 緊張していたのかもしれない。ね、緊張した時に出るってことあるのよ。知っているでしょ。小さな時からあたしそうだった。徒競争のスタートの時とか、試験の時、よくアクビしたわ。あれだったかのかもしれない。

男 そうかもしれないな。おれは緊張なんてしているつもりはないんだがね、知らず知らずのうち……そうだったのかもしれないよ。

女 どうしようもなかったのよ、ふっと出てしまったの。

男 そうだ、そうなんだよ。

女 生理現象、生きている証拠。

男 うん、そうかもしれない、そうだったんだよ。

女 生きているんですものね、息もしなくちゃならないし、それだったのよ。……どうしようもなかったの、ふっと……。

男、女を抱く。(女が立ち、男は膝をつけた姿勢で)

女 ね……。

男 黙っててくれ、十五秒。

女の目、遠くへ。

女 ……あなたが、あたしを抱いている。これ、どうかしらね、少し、あれね……。忘れられないような恰好ね、これ……。ね。

音楽。

二人、抱き合った姿勢で。

女 あなた、あたしといっしょにならなかつたら、こんなことしなかつたわ。

男 ……ああ、いや、抱き合ったりはするだろうけどさ、どこかのだれかとだって。しかし、これと同じってことはなかつたわけだ。

女 そうね、どこかのだれかとだってね、その女を抱いたりするわね。

男 お前だってさ、おれとじゃなくなつてな。食事だってそいつといっしょにしてるしさ。

女 これおいしいとか、明日はあれ食べたいとか言ったりしてね、そりゃそう。

男 ……うん。しかし、おれはお前を抱いたんだよ。

女 そうよね。

男 そうだよ。

女、更地を歩く。

男 な……抱き合ってみようか、もう一度。

女 ……あたしたち、ここへ来たわ、ここへ。

男 ……わかつてるよ。

女 ……ここにしやがんだわね、はじめ。

男 ……ああ、そうだった。

女、しゃがむ。

男、女のとなりへしゃがむ。

はじめのシーンと同じように、二人しゃがんでいる。

男の目が女へ。

女 ……うん。

男 ……そうか。

女 ……で。

男 ……いや。

女 ここ？

男 いや……ああ。

女 おんぶしてもらおうかしら。

男 え……。

女 おんぶよ。

男 ……ふーん。なにしてくれる、おんぶしたら。

女 ……ああ、なんでも。

女、男の背にぽんと飛び乗る。

男 ……どうしたんだ。

女 ……。

男 ……どうなんだ。

女 待って、十五秒。

男、時を待っている。

女 ……ちょっとしたものね。

男 経ったのか、もう十五秒。

女 感じるわ、そりや、いろいろ。

男 ああ……いろいろあったわけだしな。

女 うれしい日もあったし。

男 よかっただろう。旅に来て。

女 ありがとう、おろしていいわ。

男 なんだったんだい、おんぶ。

女 ……安心したわ、なんだか。

男 いや……うん、そうか。

女 ……見えてもおかしくないわ、お月さん、屋根がなくなったんですものね。

男 え……いや、おかしくないさ。

女 お月さん。

男 ……ああ、見えてるよ。

女、男の背からおりる。

二人、それぞれの位置で上を見ている。

音楽が高まり、二人の声、相対的に低くなっていく。

照明が暗くなっていく。

女 空ね、夜空。

男 ああ……星もあるからな。

女 そうよね。

男 屋根があったから、見えなかったんだ。

女 はじめてね、ここから夜空見たの。

二人、暗闇の中へ消えていく。

音楽が、やや尾をひいたあと、プツリと消える。

—幕—

附言——旅についての言葉は、池澤夏樹氏のエッセイ「衝動の深い起源」を、蟬についての言動は、森繁哉氏の「踊る日記」を、そしてプロローグの物語は、エスキモー族の民話「家がいきいてたころ」を、それぞれ勝手な書きかえをしながら使用させていただきました。

底本

『太田省吾 劇テクスト集（全）』

二〇〇七年九月十四日 初版発行

早月堂書房

『テアトロ』

一九九二年二月

カモミール社